

# 知的障害特別支援学校における進路指導の教育課程 — 自己実現を図る PDCA サイクルを中心に —

熊田 正俊<sup>1)</sup>・別府 悦子<sup>2)</sup>・野村 香代<sup>3)</sup>・宮本 正一<sup>2)</sup>

## Curriculum of Career Guidance in Special Support Education Schools

Msasatoshi KUMADA, Etsuko BEPPU, Kayo NOMURA,  
and Masakazu MIYAMOTO

知的障害特別支援学校の教育課程の編成において、「自己の在り方、生き方を考え、主体的に進路を選択できる能力や態度を育てる」ことを進路指導の目標として進路指導の計画を立て、小学部・中学部・高等部12年間を見通し、系統性をもったキャリア教育が進められている。

本研究では、職業的自立をめざす高等部において、作業学習、就業体験、デュアルシステムなどに取り組むことで、生徒がどのように自己理解を進めているのかを、生徒の意識を紹介しながら具体的に検討した。そこでは、教師が、①丁寧に生徒理解を進め、よりよく生きたいという気持ちを引き出すこと、②生徒のコミュニケーションの力を高め、就業体験を充実させること、③自己実現を図る PDCA サイクルづくりを行うことにより、生徒の勤労観、職業観を育て、変容につながった。

キーワード：教育課程 進路指導 キャリア教育 自己理解 勤労観 職業観

### I. はじめに

近年、知的障害特別支援学校において、高等部からの入学者が増え、数の増加と共に、生徒が多様化している。そのため、特別支援学校高等部の教育課程の編成に当たっては、一人ひとりの生徒の実情に合わせての進路指導の充実が求められている。中には、小中学校の時期に、いじめや不登校、非行などさまざまな不適応行動を起こしたり、発達障害が理解されずに不適切な対応をされたり、自己不全感をもって高等部に入学してくることも少なくない。

表1は第一筆者が勤務する岐阜市立岐阜特別支援

学校（以下、岐阜特別支援学校と記す）における高等部の生徒数の推移である。この8年間で30名以上の増加が見受けられる。また、その状態も多様化している状況にある。

このような状況の中、さまざまな生徒の発達やそれまでの経緯をふまえた進路指導が求められている。生徒が自己の在り方や生き方を考え、主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、計画的、組織的な進路指導を行い、キャリア教育を推進することが、必要になっていると言える。

ことに、高等部の段階の生徒は、心身両面にわた

表1 岐阜特別支援学校高等部の生徒数の推移

年度	19	20	21	22	23	24	25	26	27
生徒数	229	218	210	220	242	247	256	263	265

1) 岐阜市立岐阜特別支援学校 2) 教育学部 3) 名古屋第二赤十字病院

る発達が著しく、また、人間としての在り方や生き方を模索し、自我を確立し価値観を形成するという時期にある。キャリア教育においては、このような発達の段階にある生徒が自己理解を深めるとともに、自己と社会とのかかわりについて深く考え、望ましい自己実現ができるよう指導・助言を行うことが強く望まれている。

本稿は、このような状況のなか、知的障害特別支援学校高等部においてどのような進路指導を行えばよいかを考える一助として実践を報告し、知的障害特別支援学校におけるキャリア支援の課題を検討する。

## II. 進路指導の実際

### 1 学校の進路指導計画

岐阜特別支援学校では、「げんきでなかよくがんばる」という学校の教育目標のもと、「自己の在り方、生き方を考え、主体的に進路を選択できる能力や態度を育てる」ことを進路指導の目標としている。そして、進路指導の重点としては、一つに、自分のよさや個性を生かす生き方を求め続ける児童生徒を育成すること、二つに、家庭及び地域や福祉・労働関係諸機関との連携を十分図り、計画的・組織的な進路指導・就労支援体制を確立すること、に置いている。

さらに、表2のように、小学部・中学部・高等部12年間を見通し、系統性をもったキャリア教育が進められている。

小学部では、学校入学という節目を迎えるにあたり、情緒の安定を図り、落ち着いた生活を送る中で、

基本的な生活習慣や技能を身に付けることができることを目標にしている。そのために具体的な場面で実際的な活動を通じた指導を行い、繰り返し経験することを通して、生活の中で活動できる範囲を広げたり、活動を高めたりしている。

そして、集団内での役割については、教師と一緒に活動する段階、援助を受けながら活動する段階、進んで活動に参加し自分の役割を果たす段階へと高まるように、綿密に個別の対応を図っている。

あわせて、個別の関わりや学級の活動をもとにしながら、学年の活動へと広がりをもたせ、さらに学年を越えて活動する機会を設けて、集団活動の場を広げることを重視している。

中学部では、周りの人と適切なかかわりを持ちながら、協力して物事をやり遂げることができることを重視している。

また、個々の能力や適性を伸ばし、身辺自立及び基本的な生活習慣を確かなもののできるような配慮を進めている。その上で、一人一人の興味・関心をもとに作業学習に取り組み、働く喜びを感じることができるよう取り組みを進めている。

高等部では、自己理解を深めたり、情報収集をしたりして、自ら進路選択をすることができるよう、就業体験などを行うようにしている。そして、卒業後の働く姿をイメージし、願いをもって粘り強く学習に取り組み、生活を充実させることができるよう努めている。そうした上で、生徒同士互いの特性について理解し、仲間と協力して学習に取り組むことができることを願っている。

こうした取り組みを通じ、本人、保護者とともに作成する「個別の教育支援計画」「個別の移行支援

表2 岐阜特別支援学校における進路指導の全体計画

学校の教育目標 「げんきで なかよく がんばる」		
進路指導の目標 ・自己の在り方、生き方を考え、主体的に進路を選択できる能力や態度を育てる。		
進路指導の重点 ・自分のよさや個性を生かす生き方を求め続ける児童生徒を育成する。 ・家庭及び地域や福祉・労働関係諸機関との連携を十分図り、計画的・組織的な進路指導・就労支援体制を確立する。		
各学部の進路指導の目標		
小学部	中学部	高等部
生活の自立	社会的自立	職業的自立
関係諸機関との連携		

計画」において、関係諸機関との連携を明らかにするとともに、卒業後の生活に生きる支援を行うために取り組みを進めている。

## 2 高等部の進路指導計画、作業学習、就業体験、デュアルシステム

小学部から高等部までの系統的な指導を進めてい

ることを前項で述べたが、岐阜特別支援学校では社会との接点になり職業的自立が求められる高等部においては、表3のように、3年間のねらいを具体化して生徒一人ひとりに応じた進路指導を進めている。表3に示すように、日常生活の中での目標と就業体験とに分け、それぞれの取り組みを目標に応じ、具現化できることを図っている。

表3 高等部進路指導計画 進路実現に向かう3年間について

	日常生活の中での目標	就業体験（6月・10月）の取組
1年生	・自分のよさに気づく。 ・クラスをベースに、安心し合える仲間作りをする。 <u>自分を誇りに思う気持ちを育て、</u>	<校内実習> ・就労に対して前向きなイメージをもち、仕事に向かう基本的な態度を養う。
2年生	・仲間と支え合いながら、自信をもち意欲的に活動に参加する。 <u>いろいろな経験を通して学び。</u>	<校外実習> ・事業所や企業での就業体験を通して、自分の職業適性を見つめる。
3年生	・自己の特性を理解し、自覚をもち、粘り強く活動に取り組む。 <u>自立のためのたくましさを身につける。</u>	<校外実習> ・自分の方向を決め、課題をもって事業所や企業等での就業体験に取り組む。 (就労先を意識した実習場所の選択)

しかし、障害のある生徒にとって、自分を誇りに思う気持ちを育て、自立のためのたくましさを身につけることは容易ではない。それぞれの場面でそれぞれの生徒に応じた配慮が必要とされる場所である。教師はそれを支援するために生徒を理解し、生徒自らが自己実現のための目標をもてるよう、活動を組織していくことが求められている。

その中で、高等部においては、作業学習や就業体験等を通して自己理解を深めたり、情報収集をしたりし、自ら進路選択をすることができる力をどのようにつけていけばよいかを進路指導部の教師が中心になり、検討を重ねている。

ここでは、高等部工業コースを一例として、具体的な取り組みを述べることにする。

工業コースでは、図1のように、作業学習、就業体験、デュアルシステム（企業内学習）の3つの場を設けている。

それぞれの取り組みは次のようである。作業学習では、「技術を習得しながら、製品作り、販売を行い、仲間と共に働く喜びを味わうことができる」、「時間いっぱい集中して作業に取り組む姿勢や、挨拶・報告といった作業態度を学ぶことができる」という二

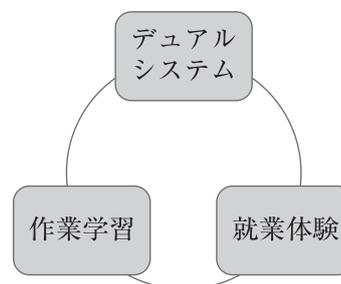


図1 作業学習、就業体験、デュアルシステム

つの目標のもとで行っている。週12時間(月水木金、各3時間)実施しており、縫製班、紙工班、印刷班、バイオ班(生物工学)、園芸班という5つの班に分かれて学習している。

就業体験では、2週間、企業・事業所で就労時に近い時間を一人で実習することになる。そこでの目標は、「作業学習で就労に向けて培った力を実際の場で実践し、自らの成長や課題を確かめることができる」、「自分の適性を理解し、進路の選択、決定に生かすことができる」という2つである。この就業体験は、卒業後の具体的な移行支援につながる場として位置づけられる。

実施日時は、年2回(6月、10月)、2週間 9:00~15:00(16:00)である。実習場所については、本



図2 園芸班 耕地の耕し



図3 バイオ班 植え付け作業

人、家庭、学校が協力して、本人にふさわしい実習場所を決定している。

「デュアルシステム」とは、作業班の仲間と共に、年間を通して継続的に行う企業内学習のことである。ここでは、作業学習を、実際の職場に移して学んでいる。

目標は、「職業現場で働くことを通して、仕事のやりがいを感じ、意欲を高めることができる」、「自分の力を十分に発揮し、自分のよさや得意なことに気付くことができる」、「働くことに必要なこと（体力、挨拶・報告等）について、実際の場で繰り返し

学ぶことができる」、「職場の人との関係を築き、コミュニケーションの力を高めることができる」、「自分の成長や課題を振り返り、1週間後の次の実習に前回の反省を生かすことができる」の5点を目標にしている。

毎週4時間（火曜日の午前）の授業として実施されている。実習については、地元の国立大学、「就労継続支援A型」事業の株式会社、スーパーマーケット、染色工業会社、ビルメンテナンス会社の地元企業等に協力を得ている。



図4 ビルメンテナンス会社 市役所の清掃作業



図5 大学の農場 ブドウの袋かけ作業

### Ⅲ 生徒の姿を通してみる就業体験の成果

#### 1 1年生Aさんの事例

ここでは、中学校知的障害特別支援学級から本校に入学した女子生徒Aさんについて述べる。

特別支援学級が1学級だった中学校と比べ、本校の高等部1年生は、重複障害学級が1学級3人、通常学級が7学級49人在籍している。学級数が多くなったことや学年の人数が多くなったことで、戸惑いも大きかったようであった。Aさんは、もじもじしていることが多く、自分の意見を言うことはほと

んどなかった。

給食はランチルームで食べることになっている。中学部52名、高等部158名が一緒に食べることになる。200名を超える大人数が食事することにも驚いたようであった。食が細いAさんは、給食の途中で食べるのが難しくなると、食事を止め、黙っていた。周りの友達が何か声をかけてくれるのを待っている様子だった。Aさんの様子に気付いた学級担任が、「食べるのが難しくなったら、先生に合図を出してください。そして、残していいですかと尋ねてください。」と教えた。このことで、Aさんは食べ

ることが難しくなると、手をあげて先生に合図を送るようになった。そして、先生に「給食を残してもいいですか。」と相談できるようになった。

困った時に先生に相談することができるようになると、Aさんは徐々に自分の気持ちを表現できるようになってきた。7月は応援団員に立候補し、皆の前に立って、自分の決意を発表することができるようになった。また、9月に、後期の係りを決める時には、代表委員に立候補するようになった。他の立候補者と比べると、大きな声で発表することが難しいので、当選は逃したものの、皆の前で発表しようと意欲的になり、Aさんなりに自信をつけてきた。

10月の1年生第2回就業体験では校内実習を行い、企業から依頼された紙袋作成や箱折の仕事に取り組んだ。下記はAさんの目標である。

#### Aさんの目標

- ・指示を受けたら大きな声で返事をして作業する。
- ・分からない時や不安な時は自分から主任（教師）に確認する。

紙袋作成では、Aさんは紙を線に沿って折る線折りの仕事を担当した。指示を受けるときちゃんと返事をして作業に取り組むのだが、線が薄い色であるためか、線に沿って折ることが難しかった。教師が個別指導を行ったが、線に沿って折る作業が難しいことが分かったので、Aさんができそうな仕事として、紙袋に底板を入れる仕事を設けた。教室に完成間近の紙袋が20袋並んでいる。袋に底板を1枚入れる。次に、隣の袋に底板を入れるという仕事である。教師が範を示しながら説明をした後、Aさん自身も底板入れの作業を行った。少し様子を見て、Aさんが自分で作業ができるようになったことを確認したうえで、一人で取り組むことになった。Aさんの返事から、「これはできそうだ」と教師が判断した。

実際に、底板入れをしてみると、底板が入っていない袋があった。おおよそ3袋に1袋、底板の入れ忘れがあった。そこで、20袋並べることを改め、10袋続けて底板を入れることを目標とした。やってみると、やはり底板の入れ忘れがある。本人には、「底板を入れたのに、おかしいなあ」という戸惑いが見られたようであった。

仕事の様子から、注意が続かないことが原因と考

えられたので、Aさんに手順が分かるように「(底板を)入れる」、「入れたら次の袋」、「入れる」、「入れたら次の袋」とわかりやすく提示し、作業の隣の袋にAさんの注意が向くように指導を行った。

Aさん自身が、「入れる」、「入れたら次の袋」というように、自分で確認しながら作業を行うようになり、その後、次第にミスが減っていった。10袋点検で合格できるようになり、大きな声で報告するようになった。できるようになった自信によって、大きな声を出すようになった。10袋続けた作業後、連続底板入れの数を伸ばすようことを目標とした。Aさんは前向きに取り組み、連続底板入れの記録伸ばしに挑戦した。最終的には、2週間の実習で、20袋連続合格まで記録を伸ばすことができた。

下記は、底板入れの仕事がきちんとできるようになったAさんの就業体験後の振り返りである。

#### Aさんの就業体験後の振り返り

底板入れをがんばりました。テキパキ動くことと大きな声で報告ができました。すばやく動いて袋を運べました。

Aさんは、今後の学校生活について、「どんな時もおちついて行動できるようにしたいです。分らない時や不安な時は自分から主任（教師）に確認することを、これからも続けたいです。」と語っている。

就業体験後も、Aさんは作業学習に前向きに取り組んでいる。「これを、お願いします。」「はい、分かりました。」など、素直な言い方で人に接することもできている。また、困った時には、自分から周りの人に確認をしたり相談をしたりする姿がある。

学級では、老人福祉施設訪問で、挨拶の仕事に立候補し、仲間から承認を受けることもあった。毎日の生活で、以前よりも大きな声で話すAさんの姿が認められるようになっている。

## 2 2年生Bさんの事例

ここでは、作業学習バイオ班の2年生男子生徒Bさんについて紹介する。Bさんは中学校特別支援学級を卒業した後、高等部工業コースで学んでいる。

バイオ班は、独立行政法人岐阜大学応用生物科学部附属教育研究センターと連携を図り、新種のスパティフィラム「フェアリーウィング」などを育てて

いる。Bさんは、この作業に一生懸命に取り組み、植え付けや培地作りなどの仕事を担当している。これらの作業は、たくさんある手順に正確に取り組まなくてはならない。また、薬品などを正確に計測するとともに、安全に作業を行う必要がある仕事である。繰り返しのなかで、Bさんは複雑な作業を理解して、正しく行う力を身に付けてきた。

ただし、自分ができることを他の人ができない時に、相手の気持ちを察することが難しい場合がある。仲間に「～やれよ。」と命令口調になったりする場合もある。そういう場合、教師から穏やかな口調で「もう1回言ってごらん。」「今の言葉でいいの?」「正しくは?」と言われることで、自分の言動を振り返り、望ましくなかったことに気付いて言い直したり、「すみませんでした。」と謝ったりできるようになった。2年生になり、以前に比べて、教師からの指摘に対して、言い訳したり、言葉尻をとらえて言い返したりすることが減ってきている。

第2回就業体験では、「就労継続支援A型」事業の株式会社においてバイオに関係する実習を行った。この企業は、デュアルシステム（企業内学習）においても、岐阜特別支援学校の生徒の受け入れがある企業であり、知的障害のある生徒に対して、特性に応じた対応がなされている。

Bさんは次の目標をもって、就業体験に臨んだ。

Bさんの目標

- ・5時間、最後まで姿勢を整えて作業をする。
- ・ていねいな言葉づかいで話す。
- ・早めに就寝するなど生活のリズムを整え、自分の力を十分に出せるようにする。

Bさんは、就業体験でシイタケやワサビの栽培、キャベツ加工、ワサビ培養を担当することになった。

ワサビ培養では、クリーンベンチを使ってワサビの芽の先端を切り取る作業に取り組んだ。初めての経験で戸惑うことも多かったようだが、興味のある仕事を担当できて嬉しかったようである。本人は「ワサビの成長点を取ることを、一発で覚えることができた。」と充実感を表現している。家庭でも、満足気にそれを報告をしたそうである。

シイタケの作業などにも慣れてきて、報告・連絡・相談も随分できるようになり、それを企業の方から

認めてもらえるようになった。

一方で、課題として、Bさんが「少し素直になれなかったので、次は気をつける。」と実習記録に書いたことがあげられ、そのことについて、ここで説明を加える。

ワサビの植え付けは、Bさんにとって少し難しい仕事である。カビが生えないように、瓶のふたを取るときにガスバーナーであぶり消毒すること、植え付け後も、もう一度あぶり、消毒してからふたを閉めることを、実習担当者から教えられた。

Bさんは、説明された通りにガスバーナーであぶり、消毒してから瓶のふたの開閉をしていた。しばらくしたとき、担当者が、Bさんがガスバーナーであぶる工程をしていないことに気付き、「今のやり方は違ったよね。」と指摘した。すると、Bさんは「今、やろうと思っていました。」と言い訳をした。そのため、Bさんは、担当者から「注意されても素直に認めようとしないう姿勢を改める」ように指導を受けた。

また、「今は、たまたま間違えただけです。」と言い、再度指導を受けたこともあった。他の人から指摘されると、素直に受け入れたり、「すみません。」と言えなかったりする面が、就業体験中についつい出てしまったのだろう。一つボタンを掛け違えると、素直になれないBさんの一面がかいま見れた。

Bさんの就業体験後の振り返り

ワサビ植え付けで、以前やったことを思い出すことができ、素早く動けるようになった。シイタケ収穫では、デュアルでやってきたことを生かして素早くシイタケの状態を確認し、収穫できた。

今後の学校生活では、「ワサビ植え付けなど、少し難しいものがでてくると作業が雑になる時があったので、学校ではそういうことがないようにしたい。素直でなくて注意されることが多かったので、自分の態度には慎重になる。」ことを目標として挙げている。Bさんは、この就業体験において「素直に注意を受け入れる力」を身に付ける必要性を実感したようであった。

また、後期の係り決めで、学級から生徒会役員に立候補する代表委員を推薦することになった。学級としての推薦の条件は、「みんなのために働く人」「や

り遂げる人」「大きな声でリードする人」の3つであった。この条件にふさわしい人として、仲間からBさんが学級の候補として推薦された。仲間からの推薦について、Bさんは「まさかこんなふうになるとは思ってもみなかった。」と言うほど意外な推薦であったが、嬉しい推薦でもあった。推薦されたことで、Bさんは大変にやる気になった。そして、「(自分は)副会長をやる!」という決意を友だちに伝えた。

しかし、結果は、副会長には落選し、図書委員長に当選することとなった。希望していた副会長に落選したこともあり、Bさんは図書委員長について「こんな仕事はやりたくない。」と言う。周囲からは、「どんな仕事も、みんなのためになる仕事だよ。」「Bさんは本が好きだから、図書委員長になるといいよ。」などの声をもらった。家庭では、母親が「図書館新聞を書いたらどうかな。目立つ仕事もいいけれど、地道に新聞を書いたりすることも大切な仕事だよ。」と働きかけた。周囲からの励ましや期待などにより、最終的には、Bさん本人も図書委員長をやる気になったようである。

選挙を通して、Bさんが学んだことを考えてみる。学んだことの一つ目は、自分が周りからの信頼を得るようになっていくことに気付くことができたことである。学級からの推薦は、Bさんにとってこの上もなく嬉しかった。2年生になり、相手を思いやる言動が増えたBさんに成長したことを、学級の仲間がBさんのよさとして認めるようになったからこそ、「みんなのために働く人」「やり遂げる人」「大きな声でリードする人」という3条件を満たす人として推薦されるようになったのである。

二つ目は、自分の特性に気付いたことである。副

会長落選という事実は辛いものであった。「自分は副会長にふさわしいのに、どうして落選なんだ。」とショックを受けたに違いない。しかし、周りは、読書が好きなBさん、小説を書くことができるBさんには、図書委員長を任せたいと考え、何人かの仲間がBさんに伝えている。また、母親から「図書館新聞作り」を提案されたことで、Bさんは「自分が好きな本をみんなに紹介したい。新聞にはイラストなども描いて、みんなが楽しく読める新聞にしたい。」という考えが浮かぶようになり、図書委員長をやってみるのも面白そうだと考えることができるようになった。落選にこだわるBさんは、落選しても自分のよさを生かす道に向かって歩みだそうとする姿に変容しつつある。また、図書委員長になったBさんは、お昼の図書当番として責任を果たすとともに、図書館新聞を作成し、お勧めの図書を紹介している。また、図書委員会として「図書館に入れてほしい本のアンケートの実施」を新たに提案するようになっている。

Bさんにとっては、辛い選挙結果であったが、よきにつけ悪しきにつけ様々な事を自分なりに精一杯受け止め、周囲からの助言や励ましなどを受けながら自分づくりを進めている中でのでき事である。この経験は、自分の職業適性を見極め、よりよい自分づくりへの糧となっている。

### 3 自分を見つめる場

こうした作業学習、就業体験、デュアルシステムにおいて、A校では自分を見つめる時間を設け、自己理解を深めている。例えば、実習においては表4の実習記録により自己理解を深めている。

この取り組みの中では、記録することが、生徒が

表4 自己理解を深める実習記録

【実習記録の主な内容】			
I. 作業前			
1. 期間	2. 時間	3. これまでの「作業学習」「専門教科」をふりかえって	4. 実習中の作業内容
5. 職場実習のめあて	6. 実習先までの交通機関について	7. 持ち物・服装	8. 先生より
II. 毎日の記録			
1. 月日	2. 就業体験先に着いた時刻、家に着いた時刻	3. 今日の作業内容	
4. 自己評価 (①基本生活、②対人関係、③作業能力、④作業態度について4段階で評価する)			
5. 今日頑張ったこと、工夫したこと、学んだことなど		6. 明日への課題	
7. 就業体験先の方から	8. 巡回者から	9. 家庭から	
III. 実習後			
1. 実際の作業内容		2. がんばったこと、できるようになったこと、うれしかったこと	
3. これからの学校生活での課題		4. 保護者より	5. 担任より

自分を見つめる場になっている。実習前には、自分の取り組む作業を具体的に確認し、今回の実習の目標を明確にする場になっている。実習中は、毎日の記録をまとめることで、自分の実習への取り組み方

を見つめることになる。就業体験先の担当者、巡回訪問した教師、家庭からの記録の欄も設けてある。その例を表5に紹介する。

表5 実習記録の「就業体験先の方から」「巡回者から」「家庭から」の書き込み例

ビデオ等のレンタル店で就業体験をした生徒の実習記録例	
就業体験先の職員から	昨日のエアコンに続き、店内がピカピカになりました。清掃はホコリも多く大変ですが、一生懸命やってくれたので助かっています。あと2日、がんばって下さい。
巡回者から	本日もご指導ありがとうございます。前回に比べて、本人の掃除に対する姿勢も変わってきているように感じます。温かい見守り、声かけ、ありがとうございます。
家庭から	〇〇さん（企業の実習担当者）、見守り、ご指導等、ありがとうございます。「店内がピカピカになりました。」と言ってもらえると、本人のやる気につながります。大変でしょうが、あと2日よろしくお願いします。

就業体験先の職員、教師、保護者からの言葉から、生徒は自分の実習態度がどのように思われているかを理解することになる。本人、家族、学校と企業による事前の打ち合わせを生かして、企業からは本人の特性に応じた実習内容が準備されたり、実習中の指導や支援をしてもらっている。このため、就業体験の場は表5の例のように、生徒自身が前向きな自分、できるようになった自分を理解する場になっている。本人を中心にした、家庭、企業、学校の連携により、生徒が自分のよさに気付く場になっている。

#### 4 考 察

##### (1) 指導の成果

ここで指導の成果と考察される事項をいくつか整理する。

一つは、教師たちが丁寧に生徒理解を進めることで、生徒たちのよりよく生きたいという気持ちを引き出すことができたことである。

さまざまな経過を経て入学してきた1年生時は、一人一人の生徒理解を丁寧に進めるとともに、受容的に生徒に接することが必要である。ある緘黙の生徒が自分なりに表現したいと願っていることを理解した担任の教師が、生活に必要な自分の気持ちを表現するカードを作成して生徒に渡した。すると、生徒がそのカードを使って、自分の気持ちを周囲に伝えようとするようになった。その生徒の嬉しそうな表情が忘れられないと教師は述懐する。自分なりに気持ちを伝えられるようになり、その生徒の世界が一つ広がっていったのである。その生徒なりによりよく生きたいという気持ちをもって、周囲

の人とかかわって自分なりの役割をもって生きていきたいという気持ちをもって、信じて指導・援助を進めていることがわかる。

二つには、コミュニケーションの力を高め、就業体験を充実させることの意味である。

1年生のAさんが「分からない時や不安な時は自分から主任に確認をすることをこれからも続けたいです。」と考えている。このように、不安や困ったことについて、生徒が大人に相談することができるのはどうしてだろうか。それは、本人と周りの人々との関係がよく、安心して言い合える関係だからである。また、勇気を出して相談した結果、不安や困ったことなどが軽減し、就業体験が充実したという経験をしたからであろう。「困った時に相談してよかった」という経験の積み重ねにより、生徒の相談する力が高まっているのだと判断する。

また、上級生になるにつれて、コミュニケーションを積極的に図ろうという姿勢が高まっている。周りの人とやり取りができるようになって、場や相手の状況に応じて、さらによりよいコミュニケーションの力を身に付けることができるように意図的継続的に指導・援助していることが明らかになった。

三つ目は、自己実現を図るPDCAサイクルづくりの重要性である。表6に、このサイクルをまとめた。

2年生のBさんは「素直でなくて注意される多かったので、自分の態度には慎重になる。」と考えている。自分に都合の悪いことであっても、それを受け止め、改めようとしている姿勢を高く評価したい。やるべきことが分かっている、周囲の仲間のようにできない自分であることに気付くときがあ

表6 生徒の自己実現のPDCA サイクル

- ・安心してありのままの自分を表出できる（受容的な環境）
- ・自分のよさや弱さを知る（自己理解）
- ・自分の目標を決める（自己決定）
- ・目標の具現のために努力する（自己努力）
- ・困ったら工夫したり相談したりして乗り越える（支え合う仲間、共感的理解）
- ・やり遂げた喜び、自分のよさに気付く（自己実現、自己肯定感、成長した自分に気付く）
- ・やり遂げた喜びを分かち合う（よさの相互理解、共感的理解）
- ・役に立った自分に気付く（自己有用感、社会とのかかわり）

\*上記のような過程にPDCA サイクルで取り組みながら、社会とのかかわりを深める

る。しかし、うまくできない理由を周囲のせいにして、自分のやり方にこだわって改めることができなかつたりする。このために、気持ちが不安定になったり、周囲への攻撃的な言動が多くなったりする。気持ちの揺らぎの中で、「このままではうまくいかない。自分のやり方を変えた方がいい、変えなくてはなくてはいけない。」と考えるようになる。自分の在り方を見つめ、できないことをできないと受け止め、周囲からの指導・援助を受け入れるようになる。指導を受けて望ましいやり方に改めたり、目標をもって前向きに取り組み続けたり、困ったことを周囲に相談して困難を克服したりして、やるべきことができるようになる。「できた」「自分もできるんだ」という喜びを味わうことで、「次も頑張ろう」という前向きな気持ちが生まれたり、「次はこんなことができるようになりたい」という目標に向かって取り組んだりするようになったように見受けられた。

高等部は模索の時期だからこそ、生徒の迷いや揺れを受容しながら、本人の状況に寄り添いつつ、本人に応じた指導・援助を行い、本人の前向きな姿勢を高めていく必要がある。生徒たちは、表6のような過程を通して自己理解を深めるとともに、自己と社会のかかわりについて深く考えるようになっていると言えよう。

## （2）今後の課題

しかし、このように一人一人にそった指導を展開していても、多様な生徒、しかも模索の青年期を支える指導には課題が多いのも現状である。下記に課題を整理する。

### ①多様な生徒への寄り添い方を明らかにする

生徒の心身の発達や障害の状況、それまでの経過や家庭背景は多様になり、不安や悩みを抱えながら生活をしている。だからこそ、一人ひとりに寄り添い、生徒理解を深め、指導・援助していくことが必

要である。中には、医師やソーシャルワーカーなどの専門職との連携も必要な事例も増えている。こうした一人ひとりに応じた寄り添い方を進展させていくことが求められている。

②働く力を高め、働く人になる教育課程の充実を図る  
就業体験の場では、生徒が真剣に作業している。お客様に喜んでいただくためにどうすればよいかを考えるからこそ、周囲からの助言を受け止め、よりよい自分づくりに取り組んでいく姿が見いだせる。しかし、それを実際の労働現場で生かすには課題も多い。生徒の職業的自立を目指すためにも、生徒の働く力をより高め、社会へのソフトランディングができるよう、教育課程の在り方を検討していく必要がある。

## Ⅳ. 総合的考察

### （1）事例の考察

就業体験では、仕事内容を覚えるという点に加えて、働くための心構えを身につけることも重要な目標である。Aさんの場合は、仕事の内容で不明な点があった場合に相談をする力が育っていった。“困ったら相談する”というのは非常に当たり前のようだが、実際は“困った状況”がありつつ雇用主や周囲の仕事仲間が思う部分と合わせていくというのは、非常に難しい作業である。実際に、Aさんも当初は底板の入れ忘れがあっても、「底板を入れたのに、おかしいなあ」と戸惑うだけにとどまっていた。そこで、少しずつ段階を踏んだ指導が入っていくのだが、このように困る点、できていない点を明確にしていくこととあわせ、教えてもらえることでできることが増えていくという達成感を得る体験につながったことが重要であった。

また、Bさんの場合は、課題を指摘されたときに、

「今、やろうと思っていました」や「今は、たまたま間違えただけです。」と答えることが多くあったが、これは指摘されたことへの焦りから、とっさに原因をストレートに伝えてしまった可能性も考えられる。仕事をする中では、指摘されたあとにとるべき行動は、失敗を素直に認めることが第一であるというルールを、何度も繰り返し指摘されることで身をもって理解したのではないだろうか。そして、他者からの予想外の発想や指摘を受け入れることで、自分の可能性を広げていくことができたのだろう。

このように、学校教育の中では経験できない働くための心構えを、実際に就職する以前に習得しておくことが重要である。

## (2) 特別支援教育における進路指導の課題

特別支援教育における進路指導は、重要な検討課題の一つである。思春期・青年期は「疾風怒涛の時代」と言われるが、その中で自己に向き合いながら、子どもから大人になること、また学校という守られた空間から社会へと巣立つという二つの移行をくぐらなければならない。したがって、進路指導は青年期の人格発達の課題と関わってじっくり丁寧に進めていく必要がある。

しかし、高等部の3年間はそれまでの義務教育での経験の上になって、学校生活を充実していきながら、次の進路も考えていかななくてはならない、という時期であり、上記の二つの移行課題を達成していく上では限られた時間ともいえる。ことに高等部から初めて特別支援学校に入学してくる生徒が増加し、中には義務教育段階でさまざまな背景や二次障害を抱えている生徒の対応に苦慮している現状も指摘されている。このような中で、高等部の進路指導では、社会にすぐに役立つことを主眼にした取り組みを行っているところも少なくない。

本実践は、じっくり丁寧に教師が生徒理解を進め、さまざまな体験を内外の人的・社会資源を活用して行いながら、生徒の気持ちに伴走するような取り組みを進めている点が重要であろう。その中で、気持ちが不安定になったり、周囲への攻撃的な言動が多くなるなど揺らぎの中で自分の在り方を見つめ、できないことをできないと受け止め、周囲からの指導・援助を受け入れるようになった事例、指導を受けて望ましいやり方に改めたり、目標をもって前向きに取り組み続けたり、困ったことを周囲に相談し

て困難を克服したりして、やるべきことができるようになった事例など、指導の中で、青年期に自己を受容し、自己肯定感を育む実践を展開していることは重要であろう。

障害者の権利に関する条約（障害者権利条約）の第24条には、「障害者がその人格、才能及び創造力並びに精神的及び身体的な能力をその可能な最大限まで発達させること」。また、「障害者が差別なしに、かつ、他の者との平等を基礎として、一般的な高等教育、職業訓練、成人教育及び生涯学習を享受することができることを確保する」とされている。

「可能な最大限まで発達させる」、という視点に立った時に、高等部の3年間は短い期間である。それまでの傷つき体験を癒し、自己を受容していくことにじっくりつきあった上で、自己理解をもとにした進路指導を進めていくことが欠かせない。そういう意味で、青年期教育を長い時間で行っていくことを目的とした、全国で行われ始めている高等部専攻科の設置や生涯学習の場の拡大なども、今後の重要な課題であろう。

(注) MS (マナーズ・スピリット) リーダーズ活動:「岐阜の未来は君たちで」をキャッチフレーズとし、高校生自らが自発的に取り組む「生徒の生徒による生徒のための非行防止・規範意識啓発活動」をいう。

## 引用文献

- 文部科学省 (2009) 特別支援学校学習指導要領解説 総則等編 (高等部) 平成21年12月 p.125~126.  
 障害者職業総合センター (2012) 発達障害のある人がよりよい就労を続けるために p.77.  
 辻正 (2015) 知的障害児の青年期の発達と特別支援学校高等部専攻科の取り組み, 日本臨床発達心理学会東海支部研修会 (2015年11月28日) 資料.

(付記) 本稿は、熊田正俊が実践報告 (Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ) を、別府悦子が問題 (Ⅰ) と総合的考察 (Ⅳ (2))、野村香代がⅣ (1) を主に執筆し、宮本正一が全体を校閲した。実践報告の許可をしてくださった、学校の教職員の皆さん、保護者の皆さん、に深く感謝いたします。

(2015年12月18日 受稿)